

『龍溪王先生全集』卷十三訳注（七）

二松学舎大学宋明資料輪読会王龍溪班

山路 裕

【凡例】

- 一 本訳注は、王畿『龍谿王先生全集』卷十三（序類）の訳注である。参加者は田中正樹（陽明学研究センター員）・山路裕（二松学舎大学大学院博士後期課程単位取得満期退学）・陳鵬飛（二松学舎大学大学院博士後期課程）である。
- 二 底本には万曆十六年蕭良幹刊『龍谿王先生全集』二十卷（四庫全書存目叢書所収）を用いる。校勘には、万曆四十七年丁賓刊『龍谿王先生全集』二十二卷（国立公文書館所蔵）を用い、注記の際は「重刊丁賓本」と略称する。
- 三 本稿の構成は【原文】【校勘】【訓読】【現代語訳】【語釈】の順に構成される。なお、必要があつて補説や資料を加える際には、【語釈】のあとに加える。
- 四 原文には、語釈に対応する番号を右傍に附す。また、文意や理解を助けるために訳者が補つた言葉は（一）で示し、言い換えや解説的な補足のための言葉は（二）で示した。

「鄒東郭先生續摘稿序」

【原文】

嘉靖乙酉秋、予偕緒山子赴冲玄之會、道出睦州。少府對崖周子示予以東廓先生之集、曰「此第三續稿也」、且屬之言。予惟先生之集傳于人久矣、初稿刻于廣德、次刻于維揚、今復刻于睦州。雖其前後所見不無淺深精粗之異、而脩詞命意、一惟師說之守、則先後反覆、未嘗少有所變也。

先師之說以良知為宗。良知者、本性之靈、誠之原而物之則也。意者其幾也。物者其日可見之行。觸幾而應、應而常寂、因物而感、感而常靜。虛實相生、有無相形、不可以致詰。是義也、及門之士、孰不聞之、孰不能言之。然能實致其知、守而不變者、蓋鮮其儔。以先生之才力譽望、有足自命、使其更加一說以抗之、亦足以章教而鳴世、而先生之心、則有所不忍也。

夫學之不明、千百年于茲。世之學者、沿習于意見之偏、測度假借、非溺于虛妄、則入于支離、中行既鮮、法守無稽。而先師首倡良知之說、以一人嘖嘖其間、寢幽寢明、僅僅以有今日、蓋亦艱矣。所幸良知在人、不容自泯、苟非泥于意見、先橫不然之心、未有聞之而不信者。吾人相與一意發明、宣暢而引長之、猶恐告者之瀆而信者之未至。况忍更加一說、以滋其惑乎。

昔者孔子之門人、各以其所見為學、而後散之四方、莫相統一、故傳之不能無弊。求其深信不失其宗者、顏·曾氏之外無聞焉。是雖同為誦法孔子、而意見之私、有以累之也。今日之弊、亦居然可見矣。先生服膺良知之訓、緣聞而修、求入于悟。寡欲以為靜、非為虛也。應物以為常、非為支也。教學相長、以教為學、不以所得為有餘。而以習見難舍、未能通微、以復完本體為不足。其用心可謂勤矣。譬之克家之子、日勤幹蠱、謹守家法、惟恐有所更改廢墜、以陷于不孝。此正同門之所不

能及、學之日躋于精深而未已也。

常語學者曰、「後世講學、自習染之後言之、退然以聖人爲不可及、而不察良知本體原與堯舜無異。是自畫也。或失則餒。其或傲然自謂與堯舜同體、而不悟嗜慾汚染之所因。是自欺也。或失則誣。皆非所謂善學也」。然則先生之所自信與其自立者、有可知矣。

【校勘】

予以東廓先生之集 重刊丁寶本是「郭」に作る。

【訓読】

嘉靖の乙酉の秋、予緒山子と偕に冲玄の會に赴くに、道に睦州に出づ。少府の對崖周子予に示すに東廓先生の集を以てし、「此れ第三續稿なり」と曰ひ、且つ之れに言を屬す。予惟みるに先生の集人に傳はること久しく、初稿は廣徳に刻せられ、次は維揚に刻せられ、今ま復た睦州に刻せらる。其の前後に見る所に淺深精粗の異なり無くんばあらずと雖も、而も脩詞命意は、一に惟だ師説を之れ守るのみなれば、則ち先後の反覆、未だ嘗て少しも變ずる所有らざるなり。

先師の説は良知を以て宗と爲す。良知とは、本性の靈、誠の原にして物の則なり。意とは其の幾なり。物とは其の日に見る可きの行ひなり。幾に觸れて應じ、應じて常に寂、物に因りて感じ、感じて常に静なり。虚實相ひ生じ、有無相ひ形はるれば、以て致話す可からず。是の義や、及門の士、孰か之れを聞かざる、孰か之れを言ふ能はざる。然れども能く實に其の知を致し、守りて變ぜざる者は、盖し其の儔鮮し。先生の才力譽望、自ら命ずるに足ること有るを以て、使し

其の更に一説を加へて以て之れに抗はば、亦た以て教へを章らかにして世に鳴るに足りて、先生の心は、則ち忍びざる所有るなり。

夫れ學の明らかならざること、茲こに千百年なり。世の學ぶ者、意見の偏に沿習し、測度假借し、虚妄に溺るるに非ずんば、則ち支離に入りて、中行は既に鮮く、法守は稽ふる無し。而るに先師首めて良知の説を倡へ、一人其の間に呶呶するを以て、寢く幽寢く明、僅僅として以て今日有るは、盖し亦た艱し。幸ひとする所は良知の人に在りて、自ら汲ほす容からず、苟しくも意見に泥みて、先づ不然の心を横たふるに非ずんば、未だ之れを聞きて信ぜざる者有らず。吾人相ひ與に意を一にして發明し、宣暢して之れを引長するすら、猶ほ告ぐる者の瀆^{けが}して信する者の未だ至らざらんことを恐る。況して更に一説を加へ、以て其の惑ひを滋すに忍びんや。

昔者^{むかし}孔子の門人、各おの其の見る所を以て學と爲し、而る後に散じて四方に之^かき、相ひ統一すること莫し、故に之れを傳ふること弊無きこと能はず。其の深く信じて其の宗を失はざる者を求むれば、顔・曾氏の外聞ゆる無し。是れ同じく孔子を誦法すと爲すと雖も、而も意見の私、以て之れを累はすこと有るなり。今日の弊、亦た居然として見る可し。先生良知の訓へを服膺し、聞くに縁りて修めて、悟に入らんことを求む。欲を寡なくして以て静と爲るも、虚爲るに非ざるなり。物に應じて以て常と爲るも、支爲るに非ざるなり。教學は相ひ長じ、教を以て學と爲し、得る所を以て餘有りと爲すをせず。習見捨て難く、未だ微に通ずる能はざるを以て、本體に復完するを以て足らずと爲すは、其の心を用ふること勤めりと謂ふ可し。之れを譬ふれば克家の子、日に幹蠱に勤め、謹みて家法を守り、惟だ更改廢墜する所有りて、以て不孝に陥らんことを恐るるのみ。此れ正に同門の及ぶ能はざる所にして、學の日に精深に躋りて未だ已まざるものなり。

常て學者に語りて曰はく、「後世の講學は、習染の後より之れを言ひ、退然として聖人を以て及ぶ可からずと爲して、良知の本體は原とより堯舜と異なること無きを察せず。是れ自ら畫れるなり。或いは餒うるに失す。其の或いは傲然として自ら堯舜と體を同じくすると謂ひて、嗜慾汚染の因る所を悟らず。是れ自ら欺くなり。或いは誣ふるに失す。皆な所謂ゆる善學に非ざるなり」と。然らば則ち先生の自ら信ずる所と其の自ら立つ所との者は、知る可きこと有り。

【現代語訳】

嘉靖の乙酉（四年）の秋、予は緒山とともに冲玄の定例会に赴く道すがら、睦州（浙江省建德市）に出た。少府の周対崖（詳細不明）は、予に東廓先生の文集をみせ、「これは三つ目の続摘稿です」と言い、そのうえ序文を依頼してきた。予が思うに、先生の文集が人々の間に伝わってから久しいが、初稿は広徳（安徽省）で刊刻され、次稿は維揚（江蘇省）で刊刻され、今般また睦州で刊刻されることである。その前後に見える文章の深さや精密さに違いがないわけではないが、しかし「その」言葉つかいや込められた意図は、ひとえに先師（王守仁）の説を守っており、各文集に繰り返があつても、「師説に対して」変更を加えたということでは少しもないのである。

先師の説は、良知を宗旨とするものである。良知とは、本性の靈、誠の根源であつて事象の法則である。意とは良知の幾であり、物とは良知によつて日々見ることのできる行いである。幾に触れると応じるが、応じて常寂然としており、事象によつて感じるが、感じて常に静である。「ここに」、心と対象とが関係として生じ、有無があらわれるのであり、これ以上究めることのできないものである。この意味について、門人たちのなかで聞いたことがないものはおろうか。言うことができないものがおろうか。しかし本当にその良知を發揮し、「堅く」守つて変わらない者は、少ないように思う。（東

廊)先生の才力名声は、自ら任ずるに足るほどのものであったので、もし更に〔師説に〕一説を加えて自説と拮抗させても、やはり教えを明らかにして世に知らせることができたのであって、「そのようにしなかったのは」先生のお心としては、忍びないものがあつたからである。

いったい学問が明らかでなくなつてから、千百年が経つ。世の学ぶものは、意見の偏りに沿つて習い、「むやみと」推し量つて〔外から〕借りてくるばかりで、虚妄に溺れるのでなければ支離に入り、中道を得た者は少ないうえに、法守(法度によって自ら守る)については考えるすべもない。そこで先師は、まず良知の説を唱え、たつたお一人でその間に声をあげ、「そのことで良知は」徐々に奥深いものとなり次第に明らかになつたが、辛うじて今日を迎えたのは、大変なことであつただろう。幸運なことに、良知は人に具わつていてみずから失われるようなものではなく、もし意見にとらわれたり、先入観をもつたりしなければ、これを聞いて信じない人はいない。われわれはともにひたすら〔師説を〕明らかにし、敷衍して詳しく述べるのであるが、それでも告げる者が誤り伝えて、信じようとする者が確信しきれないことを恐れる。ましてさらに一説を加えることで、その惑いを増長することなど忍ぶことができようか。

むかし孔子の門人たちは、それぞれの考えを学問だとしたので、その後に散らばつて四方に行くと、「学問が」統一されることはなかつた。だから学問を伝えることに弊害がないというわけにはいかなかつた。門人たちのなかでも、孔子の学問を深く信じて宗旨を失わなかつた者を求めるとするならば、顔子・曾子のほかには誰もいない。それは、同じく孔子を手本としながらも、個人的な思い込みが累をなしてしまつたからである。今日の弊害も、「ここから」はつきり分かるであろう。(東廊)先生は良知の教えを身につけ、実際に聞くことによつて修め、悟りに入らうとされた。欲を寡なくして静謐となつても、虚^{からつぽ}であるわけではない。物に應對して恒常性を保持しえても、支^{はら}であるわけではない。教えることと

学ぶことは互いに補いあうものとし、教えることを学ぶことだと考えて、学び得たことをそれで十分だとはおもわなかった。「また」習見を捨てがたく微妙なところにまで到達できていないという理由で、「心の」本体に完全に立ち返るにはまだ不足だと考えた。その心配りは周到であったと言えよう。このことをたとえるならば、家を支える息子が父親の「残した」事業に日々勤めて、慎重に家法を守り、変更を加えたり途切れさせたりすることで不孝に陥るのではないかと恐れるようなものである。これはまさに同門の人々の及ばないところであつて、「先生の」学問は、止むことなく日に日に精密で深淵なものになっていくのである。

かつて学生に語って言われるには、「後世の学問を講じる人は、習弊に染まった後から言を発し、尻込みして聖人を到達できない対象とみなし、良知の本体が本来的には堯舜と異なることをよく理解していない。これは自分から見限っている」であり、「気が」萎えてしまっているのである。あるいは傲慢にも自分は堯舜と本体が同じであると考えて、嗜欲汚染の根源を悟ろうとしない。これは自分を欺いているのであり、「本体を」ゆがめているのである。どちらもいわゆる善学ではない。そうだとすれば、先生がご自分で信じていることと、ご自分が立つておられるところは、「ここから」知ることができよう。

【語釈】

①嘉靖乙酉秋予偕緒山子赴冲玄之會：「冲玄」は、江西省広信府貴溪県の龍虎山中にある道観。冲玄での講会は、嘉靖二十七年からはじまり、以後毎年開催することが決定されたが、実際に開催されたのは二十八年だけである（参考・中純夫氏「王畿の講学活動」（『富山大学人文学部紀要』一九九七年）。「緒山子」は錢徳洪のこと。「嘉靖乙酉」は嘉靖四（一五二五）

年にあたるが、おそらく「嘉靖己酉」の誤りである（前掲中氏論文、彭国翔氏「王龍溪先生年譜」参照）。

②少府對崖周子…未詳。鄒守益「冲玄錄」に名前のみえる周有之を指すか。

③東廓先生之集…本序文に關連する鄒守益の文集の刊行は、鄒守益の門人である陳辰によって『初稿』（佚）が刊行され、次いで『摘稿』が嘉靖戊戌（十七年）に刊行され、さらに後に『續摘稿』（佚）が刊行されたものようである。王畿の序文はこの『續摘稿』のために書かれた。右に挙げた文集のうち現存する『摘稿』は九卷本で、現在、台湾国家図書館・ハーバード燕京圖書館に所蔵されており、林春の序文および洪垣の跋文を収める。陽明後学文献叢書『鄒守益集』の編校説明では、王畿の序文はこの『摘稿』のために草されたものだとするが、『續摘稿』の誤りである。張衛紅「鄒東廓年譜」（北京大学出版社、二〇一三年）参照。

④脩詞命意…「脩詞」は詞句を修飾すること。「命意」は、主旨を明確にすること。

⑤一惟師說之守…鄒守益が王守仁の説を實直に守っていたということについては、同門や門人などの言葉から多く伺える。たとえば「壽鄒東廓翁七袞中序」に、「先生之事先師四十餘年、於先師之學終始發明、惟歸一路、未嘗別為立說、以眩學者之聽聞」とあるのは、後文とも關連する。

⑥良知者本性之靈、不可以致詰…『龍谿王先生會語』卷一「冲玄會紀」に、「先師提撥良知二字、乃是千聖秘密藏。虞廷所謂「道心之微」、一念靈明、無内外、無寂感。吾人只是不昧一念靈明、便是致知。隨時隨物、不昧此一念靈明、便是格物。良知是虛、格物是實、虛實相生、天則乃見」とある。また、「南遊會紀」に「格物之物是感應之實事。從無聲無臭凝聚出來、合内外之道也。致知不在格物、便會落空。良知是寂然之體、物是所感之用、意是寂感所乘之機」とある。

⑦中行既鮮…『論語』子路篇に「子曰、『不得中行而與之、必也狂狷乎。狂者進取、狷者有所不爲也』」とあり、朱注に「行、

道也。……蓋聖人本欲得中道之人而教之、然既不可得、而徒得謹厚之人、則未必能自振拔而有爲也」とあるのに拠る。

⑧ 法守無稽：『孟子』盡心下篇に「上無道揆也、下無法守也、朝不信道、工不信度、君子犯義、小人犯刑、國之所存者幸也」とあり、朱注に「法守、謂以法度自守」とあるのに基づく。

⑨ 先横不然之心：先入観によつて物事を判断すること。用例として『王文成公全書』卷三十一下に収載する、「山東郷試録」策問の第四問に対する程策に、「大抵聞人之言、不能平心易氣、而先横不然之念、未有能見其實然者也」とある。

⑩ 宣暢：『毛詩』大雅・崧高「四國於蕃、四方於宣」に対する鄭箋に、「四方恩澤不至、則往宣暢之」とあつて、広めるの意。

⑪ 昔者孔子之門人：『史記』儒林列伝に「自孔子卒後、七十子之徒散游諸侯、大者爲師傅卿相、小者友教士大夫、或隱而不見」とあるのを踏まえる。

⑫ 散之四方：『孟子』梁惠王下および公孫丑下篇に見える「壯者散而之四方者幾千人矣」を踏まえる。

⑬ 誦法孔子：『史記』秦本紀に、「始皇長子扶蘇諫曰、『天下初定、遠方黔首未集、諸生皆誦法孔子、今上皆重法繩之、臣恐天下不安。唯上察之』とある。

⑭ 意見之私有以累之也：良知の正常なはたらきを阻害するものとして、王畿は頻繁に「意見」を挙げる。「冲元會紀」に、「吾人今日致知功夫不得力、第一意見爲害最重。意見是良知之賊」とあり、また『龍谿王先生全集』卷三「宛陵觀復樓晤語」に、「吾人今日之病、莫大於意見。著於意、則不能靜以貞動、著於見、則不能虛以適變。不虛不靜、則不能空。意見者、道之賊也」とある。個人的な思い込みのこと。

⑮ 先生服膺良知之訓：「服膺」は、『中庸章句』に「子曰、『回之爲人也、擇乎中庸、得一善、則拳拳服膺而弗失之矣』」

とある。

⑬教學相長：教えることと学ぶことが相補的關係にあることを言う。『禮記』学記篇に「是故學然後知不足、教然後知困。知不足然後能自反也。知困然後能自強也。故曰『教學相長』也」とある。

⑭克家之子曰勤幹蠱：「克家（家を克くす）」「幹蠱（蠱を幹す）」はともに『周易』を典拠とする。「克家」は蒙卦の九二の爻辭に「包蒙吉、納婦吉、子克家」とあり、子が家を支えること。また「幹蠱」は、蠱卦の初六および九三の爻辭に「幹父之蠱」とあるのにもとづき、子が父の残した仕事を継ぎ、果たすこと。

⑮常語學者曰：同様の表現が、「貢院聚講話」（『東廓鄒先生文集』卷七）に次のように見える。

東廓子曰、「後世講來講去、往往自習染之後、言之、環視病症、與正學許多妨礙。故退然以聖人爲不可學、而不察良知本體原與堯舜無異。邇來習聞良知之說矣、復以意見測度、自謂與聖人同體。故遂以任意爲率性、而不察許多病證見與堯舜不同。斯二者、其害道均也。孟子千辛萬苦爭箇性善、正是直指本體、使學者安身立命、自成自道、更無覓解躲避去處、中間種種過惡、皆是自欺自畫、原不是性中帶來。……善學者必反觀內照、直求本體、果無所障、則亦臨亦保、亦式亦入、方是競競業業、純亦不已一派源流、況於有障而忍於自欺自畫乎哉」。

なお、このときに講会を主催した徐階による、「明故南京國子監祭酒贈禮部右侍郎諡文莊鄒公神道碑銘」（『世經堂集』卷十九）にも、ほぼ同じ文が引かれる。

⑯是自畫也：『論語』雍也篇に「子曰、『力不足者、中道而廢。今女畫』」とある。また前注⑮中の鄒守益の言葉も参照。

⑰或失則餒：「或失則」という表現は、『禮記』学記篇に「學者有四失、教者必知之。人之學也、或失則多、或失則寡、或失則易、或失則止。此四者、心之莫同也」とあるのを踏まえる。後文の「或失則誣」も同じ。「餒」とは、『孟子』公

孫丑上に、「其爲氣也配義與道、無是餒也」とあり、朱注に「『餒』、飢乏而氣不充體也」とあるのを受ける。

②①是自欺也…『大學章句』伝六章に「所謂誠其意者、毋自欺也。如惡惡臭、如好好色、此之謂自謙。故君子必慎其獨也」とある。

②②或失則誣…前注②①参照。なお、注①⑧中の鄒守益の言葉の省略部分には、「苟當障翳之目、病苦侵尋、而遂以離婁爲不可希、不幾於誣本體者乎」とある。

②③所謂善學…『禮記』学記篇に「善學者、師逸而功倍、又從而庸之」とある。